

# がぶくしょ

本書を編集した「21世紀の水産を考える会」について、若干その概要説明が要るだろう。当会が設立されたのは一九八二年。わが国漁業が遠洋漁業から撤退を余儀なくされ、輸入水産物が急増した時期であり、一方で消費面において「魚ばなれ」と呼ばれた現象が見られた頃である。すなわち、

わが国水産業の将来が懸念された状況下で、生産から流通・消費まで、またジャーナリスト、学者、政治家等々、さまざまなジャンルの人の参加を求め、日本水産業のあるべき方向を提起しようとして

設立された、水産NGOである。一八年間の成果として、「魚ばなれへの挑戦」(一九八四年)、「よみがえれ日本漁業」(一九九六年)等、本の出版を通して提言を行っている。本書は、その一八年間の総まとめという位置づけで編集されたものであり、三章構成となっている。第一章では、発行した九冊の本を通じて行ったそれぞれの提言内容について、その背景・根拠等も含めコンパクトに記述したうえで、提言の実現状況等事後評価を実施。その研究・提言テーマは、消費・生産・加工・流通・健康・環境等多

## 『21世紀の水産への提言』

食料産業・文化としての再生

21世紀の水産を考える会編(成山堂書店)

岐にわたっている。第二章では、総まとめの素案検討のため四都市で開催された討論会での主要発言を記録として収録。第三章で提言効果の総まとめを行い、21世紀の水産への提言」として総括し、食料産業としての位置づけが不十分、根幹にある輸入問題に手をつけていない等々、会長自身が水産庁OBということもあつてか、現在までの行政対応を厳しく整理している。

これを踏まえた、21世紀の水産への提言」として、漁業を食料産業として明確に位置づける、地域文化としての水産業と魚

食の発展を図る、世界に貢献できる水産業と魚食文化を発展させる、の三つを政策上の課題として掲げる。国民への食料の安定供給を目的とする以上、その前提として「何がどれだけ必要か」の算定がある。その必要量の確保についてはまず日本近海を優先し、不足分について養殖、遠洋漁業、そして最後に輸入の順で確保する。パラエティを含め必要量があればよく、また資源量からの漁獲制限もある水産業については、一定の計画生産と保護政策が不可欠の産業との位置づけを行い、政策による供給に見

合った労働力の確保、さらにはそれらに必要な財政的措置を講ずるべきとしている。また、その際の問題はWTOであるが、食料問題に対してのわが国の国際貢献への取り組み姿勢を明らかにし、その中で自国の食料産業の育成を行うということを自己主張すべきであるとしている。

残念なことには、第三章がわずか一七頁に過ぎないということばかりでなく、こうした政策課題実現に向けた具体的取り組みに関する議論がやや不足との印象も強い。経営所得安定政策への転換を進める同じ食

料産業である農業や、加工・流通レベルで世界調達の時代に入った食品産業等、国内的な調整をどう進めるのか。また、WTO対応についても、二一世紀中頃と予想される世界的な食料不足の視点で考

えるという点はまさに正論との感もあるが、食の自給あるいは安全保障という一国の視点での議論、工業先進国のエゴとも取られかねない面もある。国家という存在を考えればある意味で当然とは言え、世界全体としての経済バランスをどう取るか、食料という人類にとっての基本産業を自由貿易の範疇で捉えることの問題性をどう訴えるか等々についても論及が欲しかったところである。

(二〇〇一年一月、一六四頁、一、八九〇円)

(出村雅晴)